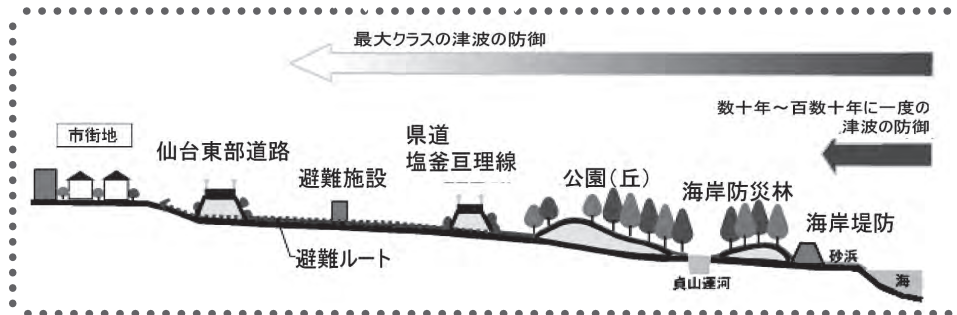


# みどりの防潮堤を造ろう

ごみ・環境ビジョン21 理事 江川美穂子



仙台市  
震災復興計画より

5月26日、宮城県岩沼市の岩沼空港南公園で、市主催の植樹祭が行われます。これは「千年希望の丘」の創造の第一歩として、「みどりの防潮堤」を提唱する植物生態学の宮脇昭氏（横浜国立大学名誉教授）が植樹指導を行い、市民500名が参加して実施されるそうです。

岩沼市では、他に先駆けて震災復興計画を策定しました。「千年希望の丘」は、東日本大震災で生じた災害廃棄物の中から、有害廃棄物を含まないコンクリート殻、流木などを活用し、避難場所と多重防御機能を有した“津波よけ”を造り、後世の人々へ想いをつなごう、というものです。

岩沼市では、災害廃棄物を選別・破碎・焼却する中間処理施設と、再資源化する処理施設が5月中旬から本格稼働していますが、このように一般的な処理を行う一方で、人々が生活してきた証である“がれき”を地球資源として土と混ぜながら埋め、高さ10～20mのマウンド（堤）を造成して、その上に多品種のポット苗を植樹、生物の多様性を保つ“いのちを守る森”にする「鎮魂」の意味も含めた有効活用を行います。同様な取組みは、岩手県大槌町でも行われ、4月30日、「千年の杜づくり」植樹会ではブナなどの苗3000本が住民やボランティアによって、植樹されました。

また、仙台市でも、震災廃棄物を使える資材として加工し、海辺の交流再生ゾーンの中で活用、盛り土をしてクロマツを主体とした海岸防災林を造る計画が、5月中に動き出します。

3月20日、細川元首相と野田総理の会談に宮脇氏が出席し、「がれきで鎮守の森を造りましょう、地元雇用も作りましょう」という宮脇提案をしたとされ、4月23日のTBS『ニュース23クロス』に野田総理が出演し、青森から千葉県までの140kmの海岸線に、がれきを利用して海岸防災林を造る「『みどりのきずな』再生プロジェクト」を発表しました（盛り土の高さ3～10m、幅50～200m）。今年度中に、50kmの整備を行う、としています。方針には、「がれきを分別・無害化し、安全が確認された再生資材を盛土材等として積極的に活用する」と明記しています。ただし、再生資材として利用するのは、災害廃棄物のうち、コンクリート片、堆積した土砂、かわら屑、陶磁器などの不燃物とされ、宮脇方式とは、

植樹する木の種類も含め微妙に異なっています。環境省の廃棄物対策課の担当者に聞いたところ、「木材は、チップ化して木質ボードや熱回収などで有効活用し、塩分などで使えないものは、チップ化したものをマウンドの表面に撒くなどの活用もします」とのことでした。

現在、岩手・宮城の災害廃棄物の総量の見直しが行われていますが、「『みどりのきずな』再生プロジェクト」では、木質系のがれきを埋め立て資材としてもっと活用してほしいと思います。そうすることで、広域処理よりはるかに安く、地元雇用を生み、温暖化の防止にもつながるでしょう。また、焼却による汚染の拡大や広域処理を巡る対立も避けられます。何よりも、被災された方々の、心の復興に役立つに違いありません。



岩沼市の植樹には細野環境大臣も参加  
(写真：共同通信)